

登山と状況判断 —その2— ギャチュン・カンからの生還

山野井 泰 史 (登山家)

僕は25年以上山に登り続けています。仕事や休養日、あるいは大きな怪我をして動けない時以外は、ほとんどの日を登るために過ごしてきました。常に大きな夢を持ちそれを実現するために具体的な計画を作りあげ自分に何が足りないかを考え、それらを改善するために努力してきたつもりです。しかし僕だけに限った事ではありませんが、先鋭的な登山を目指す者にとって必ず、怪我と病気そして死は身近にあります。厳しい自然の中、限界ぎりぎりの登山を試みる人間は、ある程度の事は覚悟をしているでしょうが、まさか自分自身が死ぬとは本当の意味では思っていないはずですが。しかし残念ながら僕は多くの友人を山で失ってきました。亡くなった彼らは何かしらの間違いを犯した事は事実だと思えますし、いまだに生き残っている僕は、運が味方したにしては、かなりの数の危険をくぐり抜けた事になります。多くの友人は運が良いから生き残っていると思っただけですが、それは必ずしも正しくないと思っています。

ここでいくつか例をあげ僕がどのようにして危険を回避できたかを話したいと思います。

今から20年以上も前の事になりますが、いわゆる本チャンと言われる国内のロングルートの人工で登られていた箇所をフリーで試みられるようになり始め、また一種の流行にもなっていました。フリー化された代表的なものとして谷川岳の一の倉沢コップ状岩壁や滝沢下部ダイレクト、大きな

壁では奥鐘西壁の中央ルンゼ等があげられるでしょう。しかしそれらの試みは現在のようにしっかりしたボルトで守られながらフリーで登るのとは違い、時にはいつ抜けてもおかしくない危ういプロテクションのもと試みられていました。リードする者は、ぎりぎりまでプロテクションに触ることなく肉体の限界の中で登っていたのです。いつ墜落してもおかしくない者を確保する方も細心の注意が必要でした。

僕は高校生のころ同級生の友人と2人で八ヶ岳にある高度差200mほどの大同心正面壁のy字ハングルートのフリー化を試みた事があります。それは夏の暑い日で、それでなくても脆い大同心の岩は、からからに乾燥しきり茶色の岩は、まるで風化してるようにさえ思えました。最初に登り始めたのは僕でした。岩ははがれやすく途中で打ちこんであるボルトの強度にも疑問があるものばかりであり信用はできません。ある程度ロープを伸ばし友人を向かい入れるために確保に入ったわけですがセルフビレーするためのプロテクションはすでに打ちこまれている7、8本のボルトで行う事になりました。友人は順調に上り僕の場所に合流するまでは良かったのです。次に友人のリードのもと最も難しいと思われるハンクに挑む事になり僕は集中して確保していましたが、どうも自分がぶら下がっている7、8本のボルトの強度に疑問を感じ始めました。「はたしてトップに行く友人が落ちた時にここにあるボルトは衝撃に絶

えられるだろうか。」勿論、僕は友人が落ちた時を考え最初に体に衝撃が来るように確保体制に入っています。このような岩質の場合ボルトよりもしっかり打ちこまれたピトンの方が信用できる事は経験で知っていました。回りを見渡すと1.5mほど上に根元までは打ちこめていない古いピトンを発見し、そこにも加重が分散されるようにシュリングを通しておく事にしました。友人はトップで、登り出してから20mぐらいの所で核心部と思われるオーバーハングにさしかかりました。すでに残置ボルト10本にはランニングビレーとしてクリップしてあります。しかし動きは思わしくなく今にも落ちそうな状態。その時です。彼の身体がハングから離れたと思った瞬間、空中を舞い落ち始めたのです。恐ろしい事にプロテクションのボルトは、次々に抜け彼の身体は僕の横を通過し落ちて行きました。そして次の瞬間、僕の体に強い衝撃が伝わった時、気を失ってしまったのです。少しして気がつくと状況は、悲惨そのもので2人の体は僕が念のためセットしておいた古いピトン1本だけでぶら下がっていたのです。友人が登りながらクリップしたボルトを含め僕がビレーに使っていたボルトもすべて抜け落ちていたのです。僕達はわずか1本の古いピトンにより助かったのです。この記録はとても若い時の怖い体験ですが、確かにいくつかの間違いを犯しているかもしれませんが決定的な所では間違っていなかったと言えます。まず八ヶ岳の岩質はとても脆いし、また大同心の僕達が挑戦したルートは初登攀されてからずいぶん時間が経っているのです。考えられるのは打ちこまれているボルトの支持力は、ほとんど信用できないという事。またこのような場所ではピトンの方が信頼できるという事など。自分で言うのもなんですが大同心を登り出してすぐ

にルートの状況を、読み取っていたと思います。またビレーポイントもすべてに均等に衝撃が加わる様にセットしていました。

次は1998年の秋 ネパールヒマラヤ マナスル北西壁に夫婦2人だけで挑戦したときの事です。この未踏の北西壁を目のあたりにした時に、すでにこの壁の危険は2人とも感じていました。雪崩の危険性が高いと言う事です。私達は日中の日が当たっている時を避け少しでも雪が固くしまる夜間に行動に移しました。それは登り始めて数時間経った夜中の1時ごろ登攀中の出来事です。新月のため周りは見えませんでした。ここまで2人ともロープを結び合わず各自、離れない様に行動していました。ロープを結んでビレーを取りながら行動しては登攀スピードが遅くなり日が昇るまでに安全地帯にたどり着けないと計算したからです。それでも6100mにさしかかるころ何か危険を感じてしまいました。特別、変わった地形ではなかったのですが広い雪面を横切らなければならず、わずかに小さな雪か氷の塊が時々落ちていただけでした。それでもロープを結んだ方が良く思えたのです。そして再び登攀を再開して10分後、セラックの崩壊から始まった巨大な雪崩が発生しました。2人とも雪崩の圧力で飛ばされ200m以上落ちたでしょう。僕は体が止まる前からなるべく片手を顔の前に持っておきながら落ちました。気がついたときは僕の体は硬い雪の中に埋まっていたのです。すでにかんりの雪が口に入っていました。口の前にある手でわずか3cm四方の空間を作る事に成功したのです。ほんのわずかですが呼吸が出来たようです。またロープを事前に結んでおいたおかげで一緒に飛ばされながらも雪に埋まらなかった彼女は、暗闇の中でも僕を探し当てたのです。なぜ私達は、かなりの時間ロープを

1. 登山技術に関する調査研究

使わずに登攀していたのに雪崩が来る10分前にロープを着けたのでしょうか。実を言うと僕にも良く説明が出来ません。ただその雪面を見た時、いやな感じがしたのです。唯一言えるのはその斜面は雪崩が発生した場合、避けられる場所が無かったからです。

そして2000年秋、ギャチュンカン7952メートルの北壁に挑戦したのです。この登攀も夫婦2人で挑んだのですが結果は僕1人が登頂し彼女は7500メートルで敗退してしまいました。しかし問題は下降です。視界がほとんど利かない吹雪の中、傾斜60度以上のところを降りていかななくてはなりません。あらゆる困難が待っていました。雪崩、墜落、食料不足、そして目が見えなくなるという最悪の状況、予定の下山日を大幅に越えましたが、それでも私達は一度もパニックになることなくベースキャンプに戻ってこれたのです。大きな雪崩を回避するためにあえて登りで採用したルートとは離れダイレクトに下降しましたが、これも正解でした。実際、ダイレクトルートを降りている時、私達が登りで使ったルートには2度以上大きな雪崩が発生していました。またわずかにしかないピトンを大切にするため技術的に難しいクライムダウンもしましたし、目が見えない中のピトン打ちでも素手で岩の割れ目を探り、それに合わせたサイズのピトンをしっかりと設置したのです。食料や燃料が無くなってからも雪をなるべく口に含み水分補給をしました。高所で全く水分が取れなくなると動けなくなる事を知っていたからです。また自分たちの残りの体力も把握していました。どこでどれだけ体力を使えばベースキャンプに帰れるか、あるいはどこでは多少気を抜いても良いかなども理解していたのです。

僕はこのようにいろいろな状況に追いこまれて

も帰ってこれたのです。確かに登山は危険です。ここで書く話ではありませんが、怪我などしたくないならば山などに登らない事です。山に挑戦する限り残念ながらリスクを完全に排除する事は不可能です。それでも登りたい人に僕が言えることは、計画の段階で必ずこれから挑む山の大きさや困難度を正しく理解する事です。自分の技術、体力で頂上に立ち、また下降できるのか真剣に考えるべきでしょう。イメージトレーニングも良いかもしれませんが。ましがっても自分の能力を過信してはいけません。それには、あまり間隔を開けず山へ登って自分の力を理解していなければならないでしょう。しばらく登っていないと自分の能力を忘れるものです。数をこなす上でよい事は他にもたくさんあります。頻繁に山に行くにしたがい登山中に潜む危険や大自然が伝えようとしているものを感じ取れるようになるのです。雪や岩の性質、天候、ロックピトンやアイスピトンの強度、山の大きさなど、ここでは上げられないほどの経験を積めるでしょう。そしてあらゆる状況に陥っても、いくつもある選択肢の中から最高の方法を素早く判断できるようになるはずだと思います。しかし何度も山行を繰り返しても危険や大自然に対して理解を深めず、また判断する力も備わらない人は残念ながらいます。それは持って生まれた才能にもよると考えられますが、特に便利な物に囲まれた現代人は昔の人々よりも危険に対する認識が失われてきているように思われます。確かにいろいろな実験から出てくるデータも必要になる時がありますが、肌で感じる山の危険も大切にしなければと常に思っています。僕は山と自分自身を理解しながら再びレベルを上げながら一步一步前進して行きたいと思っています。